

# 連合艦隊西進す2

紅海海戦

横山信義

*Nobuyoshi Yokoyama*

## 立ち読み専用

立ち読み版は製品版の1～20頁までを収録したものです。

### ページ操作について

- 頁をめくるには、画面上の▶ (次ページ) をクリックするか、キーボード上の▶ キーを押して下さい。
- もし、誤操作などで表示画面が途中で止まって見にくいときは、上記の操作をすることで正常な表示に戻ることができます。
- 画面は開いたときに最適となるように設定してありますが、設定を変える場合にはズームイン・ズームアウトを使用するか、左下の拡大率で調整してみてください。
- 本書籍の画面解像度には1024×768pixel(XGA)以上を推奨します。

扉 画 高荷義之  
地 図 ・ 図 版 安達裕章  
編 集 協 力 らいとすたつふ

目次

第一章	獵犬の反撃	9
第二章	共通の敵	33
第三章	航空母艦「大龍」 <small>だいりゅう</small>	53
第四章	隘路 <small>あいろう</small> の死闘	103
第五章	因縁の戦艦	153
第六章	新たなる戦場	209

# アラビア半島



ガイダ

ムカラ

シフル

アラビア海

ソコトラ島

アデン湾

ソマリランド

# アデン湾周辺図







# 連合艦隊西進す 2

紅海開戦





第一章  
獵犬の反撃

## 1

海面が白く染まり、弾けた。

たった今投下した、六番対潜爆弾の爆発だ。

コクピットに伝わった炸裂音は、エンジンの爆音や風切り音に負けないほどの轟音だ。エンジン・スロツトルを絞り、高度二〇〇メートルの低空を飛行しているためであろう。

「左旋回」

「左旋回。宜候」

零式水上偵察機の機長と偵察員を兼任する鹿田隆中尉の命令を、操縦員の鈴木慎吾一等飛行兵曹が復唱した。

零式水偵は、たった今爆発が起きた海面の周囲を、ゆっくりと左に旋回した。

海面直下には、この直前まで黒い影が見えていた。敵潜水艦——ドイツ海軍のUボートが、潜望鏡

深度に潜んでいたことは間違いない。

鹿田機は、その敵潜を目がけ、対潜爆弾四発を投下した。

一発でも至近距離で爆発すれば、敵潜は高確率で沈没する。

すぐには、何も起こらない。海面は、爆発などなかったかのように静まりかえっている。

(しくじったか?)

鹿田は自問した。

潜望鏡深度とはいえ、海面下の目標だ。水面上の目標よりも仕留め難い。

敵潜が零式水偵の存在に気づき、急速潜航した可能性もある。

不安なまま、二分余りが過ぎたところで、

「左正横に浮遊物。軽油らしい!」

電信員の羽室哲夫二等飛行兵曹が叫んだ。

「鈴木、もう少し高度を下げられるか?」

「〇一(一〇〇メートル)まで下げます」

鹿田の問いに、鈴木は即答した。

零式水偵は低速で旋回しつつ、更に高度を下げた。眼下の海面が、大きくせり上がる。

一〇〇メートルといえは摩天楼に匹敵する高さだが、航空機に搭乗する身にとっては、海面すれすれの低空飛行だ。海面のうねりや白い波頭が、はっきり見て取れる。

鹿田は、間近に迫った海面を凝視した。

「あれか！」

と、小さく叫んだ。

西方から差し込む陽光を反射して、ぎらぎらと光るものが見える。

うねりの中で散り散りになりそうだが、軽油であることははっきり分かる。

軽油だけではない。

水兵服や帽子、書類とおぼしき紙などの他、兵の遺体までが漂っている。

Uボートは艦の外殻に破孔を穿たれ、インド洋の

海底に沈みつつあるのだ。

「よし……」

鹿田は、満足の声を漏らした。

仏領マダガスカル島の陥落から、二ヶ月余り。

内地では、次期作戦の準備が進められており、英国領セイロン島には、食糧、燃料、弾薬、医薬品等の補給物資が大量に運び込まれている。

それに伴い、セイロン島近海におけるUボートの跳梁も激しさを増している。

連合軍は一時期、対潜部隊の投入によって多数のUボートを撃沈し、マラッカ海峡のインド洋側出口とセイロン島を結ぶ航路の安全を確保したが、ドイツ軍も地中海、紅海を通じて、新たなUボートを多数、セイロン島近海に送り込んでいるのだ。

輸送船や護衛艦艇の被害も増大し、ここ二ヶ月で、輸送船一三隻、駆潜艇、哨戒艇等の護衛艦艇九隻が犠牲になった。

事態を重大視した帝国海軍南遣艦隊は、指揮下の

対潜部隊をセイロン島のトリンコモリーに移動させ、島周辺でのUボート狩りに当たさせた。

対潜戦闘は地味であることに加え、容易に戦果が上らない。

任務中、各艦の水測員は海中の音に耳を澄ますと共に、探信音を放つて潜航中の敵潜を探る。

哨戒に当たる機体は低速で飛行し、浮上中、もしくは浅深度に潜む敵潜を捜索する。

潜望鏡深度にいる敵潜は目視が可能だが、深みに逃げられてしまえば、空中からは発見できない。

丸一日を捜索に費やしても、捕捉・撃沈に至る敵潜は一隻か二隻だ。

敵潜を全く発見できず、空しくトリンコモリーに引き上げる日の方が遥かに多い。

鹿田らが所属する第一対潜部隊は、この日——昭和一七年八月一七日の早朝から、セイロン島の南東海上に進出し、Uボートの掃討に当たったが、日没近くになるまで発見できなかつた。

日が暮れば、空中からの捜索は不可能になるため、そろそろ母艦から引き上げ命令が来るのでは、と鹿田は思っていた。

だが、日没の一時前になって、ようやくUボート一隻を仕留めたのだ。

「母艦に打電しろ。『我、敵潜水艦ヲ攻撃ス。六番四発投下。軽油並ビニ浮遊物多数ヲ確認ス。浮遊物ノ中ニ敵兵ノ遺体アリ。二〇五二一（現地時間一七時三三分）』」

鹿田は羽室に命じた。

敵兵の遺体を確認した以上、撃沈は確実だが、母艦の「神川丸」艦長篠田太郎八太左からは、

「潜水艦は、燃料や艦内の物資を投棄し、沈没を偽装することがある。機長が肉眼で確認したもののみを報告せよ」

と命じられていた。

「母艦に戻る」

鹿田は航法のチャートを見て、鈴木に命じた。

海軍時計は、二〇時五七分を指している。

気象班の報告によれば、日没は二二時五七分（現地時間一八時二七分）。

帰還が日没後になるとときには、トリンコマリイに向かうよう命じられているが、「神川丸」との距離は三五哩。日があるうちに到達できる距離だ。

「母艦に戻ります」

鈴木が命令を復唱した。

零式水偵は西方に機首を向け、上昇に転じた。

沈みつつある太陽に向かう格好だ。日没前とはいえ、陽光は強い。色つきの飛行眼鏡をかけなければ目をやられる。

一五分ほど飛んだところで、部隊の艦艇が見え始めた。

特設水上機母艦の「神川丸」と練習巡洋艦「香取」を、八隻の駆逐艦が囲んでいる。

「神川丸」は客船からの改装艦だが、一二機の水上演習機を運用できる。

「香取」は優れた通信能力を活かし、Uボートの通信波を捉え、その位置を割り出す。

対潜部隊の中核となる艦であるだけに、重要度は高い。Uボートの側から見れば、万難を排して撃沈したい艦ということになる。

「神川丸」が取舵を切り、ゆっくりと回頭を始めた。零式水偵が機首を下げ、緩やかな角度で母艦が作り出した静水面へと降下した。

「神川丸」の上甲板に繫止されている水上機は、前甲板に四機、後甲板に七機だ。

この日の午後は、鹿田機の他、零式水偵一機、零式観測機四機が対潜哨戒に当たったが、既に鹿田機以外の全機が帰還し、収容を終えたようだった。

エンジン・スロットルが絞られ、機体が減速しつつ降下した。

下から突き上げるような衝撃と共に飛沫が上がり、鹿田機が着水した。

「神川丸」は艦首を真北に向け、鹿田機の左前方で

停止している。

沈みゆく太陽を、左舷側に見る格好だ。

鹿田機はゆっくりと前進し、母艦に接近した。

揚収機からフックが降ろされ、鹿田機の上に伸びて来た。

鹿田が立ち上がり、フックを掴もうとしたとき、不意に後席から叫び声が上がった。

「右後方に潜望鏡！」

一拍遅れて真つ赤な火箭が噴き延び、機銃の連射音が鹿田の耳朶を打った。

羽室が、電信員席の七・七ミリ旋回機銃を、右後方に向けて発射したのだ。

火箭が海面に突き刺さり、線状の飛沫が上がる。

その先に、夕陽を反射し、赤く光るものが見えた。

七・七ミリ弾の飛沫が、潜望鏡らしきものに迫った。命中を期待したとき、反射光が消えた。

「鈴木、離水しろ！ 収容は中止だ！」

鹿田は偵察員席に座り直しながら、大音声で鈴

木に命じた。

次いで「神川丸」の艦上に向けて、右腕を大きく振り回した。

海面から声を上げて、艦橋までは届かない。「潜水艦がいる。逃げる」と、身振りで合図を送ったつもりだった。

「離水します！」

鈴木が復唱を返すと同時に、零式水偵が装備する三菱「金星」四三型が、猛々しい爆音を上げた。

後ろから蹴飛ばされるような勢いで、機体が加速される。フロートが海面から離れ、機体が空中に舞い上がる。

鹿田は、後方を振り返った。

この直前まで、海面に停止していた「神川丸」が、艦尾付近の海面を激しく泡立たせ、前進を開始している。

先に、羽室が七・七ミリ弾を撃ち込んだ海面に、駆逐艦一隻が急行する。

爆雷が投げ込まれたのか、海面が白く染まり、弾け散る様子はつきり見えた。

## 2

爆雷の炸裂音は、深さ八〇メートルの海中に潜むU568の艦内にも届いた。

距離があるため、水中爆発の衝撃は伝わって来ないが、回数は多い。

日本軍の駆逐艦は、狭い海面に集中して爆雷を投下しているようだ。

「爆発音、本艦の左正横。距離、約二〇〇〇」  
 発令所の艦長オットー・シュトラウス大尉に、水測士のカール・シュプケ一等兵曹が報告した。

「左正横、二〇〇〇か。どの艦だろうな」  
 第七九潜水戦隊に所属するUボート艦長の顔を、シュトラウスは思い浮かべた。

現在、この海域には、シュトラウスのU568を

含めて五隻のUボートが展開している。

うち一隻は、三五溼ほど離れた海面を行動しているが、他の三隻はU568の近くにいます。

今年の四月一三日、日本海軍の機動部隊を攻撃し、「赤城」<sup>アカギ</sup>「加賀」<sup>カガ</sup>の二空母を沈めた戦友たちだ。その功績により、全員がアドルフ・ヒトラー総統<sup>ソウテイ</sup>より、柏葉騎士鉄十字章を授与されている。

殊勲<sup>しゆくん</sup>の五隻とその乗員は、ドイツ本土で休暇を過ごし、家族と再会した後、再びセイロン島近海に出撃したのだ。

その戦友の艦が、敵駆逐艦の攻撃を受けている。日没間際<sup>まぎわ</sup>と見て、潜望鏡を海面に突き出したところで、西の水平線付近から差し込む陽光が反射したのかもしれない。

（潜れ。深みに逃げる）  
 シュトラウスは、胸中で呼びかけた。

援護<sup>えんご</sup>したいが、海上にいる敵駆逐艦は八隻だ。哨戒機も、上空を飛び回っている。

この状況で、雷撃など仕掛けられるものではない。

「艦体破壊音を確認！」

「確かか？」

不意に届けられた報告に、シュトラウスは半ば反射的に聞き返した。

爆雷の炸裂音は、なおも続いている。

シュプケが、爆発音とUボートの艦体破壊音を取り違えた可能性はないか、と考えたのだ。

「爆発音とは異なります。Uボートの外殻が破られた音と推測します」

シュプケは、沈痛な声で報告した。

VII C型Uボートの乗員は四四名。

潜航中のところを撃沈されれば、ほぼ一〇〇パーセントの確率で全員が戦死する。

爆雷の炸裂音はほどなく止み、海中で聞こえる音は、敵艦の推進機音だけになった。

敵駆逐艦の乗員が、沈没したUボートから漏れ出した軽油や艦内から吐き出された雑多な浮遊物を確

認したのかもしれない。

第七九潜水戦隊は、Uボート一隻を戦列から失ったのだ。

「推進機音、右後方より近づきます」

「狼群戦法はお見通しか」

シュプケの新たな報告を受け、シュトラウスは眩つぶやいた。

ドイツ海軍の潜水艦部隊が使用している狼群戦法——Uボートによる集団攻撃については、日本海軍も知っている。

彼らは、Uボート一隻がこの海域にいた以上、他にもいるはずだと考え、捜索にかかっているのだ。

「艦長、現在の時刻は一八時八分です」

先任将校のフランツ・ノイベルク中尉が言った。

戦闘行動に入る前、航海長のヘルムート・マイスナー上級兵曹長が、「日没は、現地時間の二八時二七分」と報告している。

「別命あるまで、現深度にて待機」



シウトラウスは、全艦に命じた。

行動を起こすのは日没後、ある程度時間が経過し、闇に紛れての行動が可能になってからだ。

しばし、無音状態での待機が続く。

敵艦が放った探信音が、艦の外殻を叩く。

地獄の使者が、扉を叩いているようなものだ。敵艦が反射波を捉え、海面下にUボートがいると判断すれば、即座に大量の爆雷が投げ込まれる。

敵空母二隻を撃沈し、総統から直々に勲章を授与された身でも、特別な艦に乗っているわけではない。

ドイツ国内一五箇所の造船所で量産されているⅦC型Uボートの一隻であり、爆雷に対する防御力は、他の艦と同じなのだ。

この場をやり過ぎし、生き延びるためには、極力音を立てぬよう振る舞うと共に、探信音の反射波に捉えられぬよう祈る以外にない。

「推進機音、本艦の真上を通過。左前方に抜けます」

シユプケの報告を受け、シウトラウスはひとまず安堵の息を漏らした。

敵駆逐艦のうち、一隻はやり過ぎしたのだ。

「新たな推進機音、右後方より接近」

シユプケが、緊張した声で報告を上げる。

駆逐艦が八隻ともなると、流石に多い。一隻をやり過ぎしたと思うと、新手が来る。

苛立たしい限りだが、部下の生命と艦の保全を第一に考えるなら、軽々しく動けない。

「我慢が肝心ですよ、艦長」

「マイスナー航海長が、小さく笑った。

「獵犬は、主人の命令には絶対服従です。『待て』と言われたら、いつまでだって待ち続けるんです」

「そうだったな」

親父からも、そう教わったな——と、シウトラウスは口中で呟いた。

シウトラウスの父は腕のいい家具職人であり、「家具職人に最も大事な資質は、一にも二にも根気

だ。焦<sup>あせ</sup>ったり、苛<sup>あせ</sup>立<sup>あせ</sup>ったりしたら、お客さんが買いたいと思ってくれる家具は作れん」

と、何度もシュトラウスと二人の兄に言い聞かせたものだ。

長兄<sup>ちやうけい</sup>は父の後を継ぎ、次兄<sup>じけい</sup>は父の親友の家具職人に弟子入りしたが、シュトラウスは軍人となる道歩<sup>ちゆ</sup>んだ。

Uボートの艦長という最も忍耐力を要求される職に就いたのは、自分の身体に流れる家具職人の血故<sup>ちゆ</sup>かもしれない。

二隻目の敵駆逐艦も、U568の頭上を通過する。「海面に着水音！」の報告はない。

U568は探知<sup>まぬか</sup>を免れたようだ。

「艦長、一八時二七分を過ぎました。日没です」

「一九時まで待つ」

ノイベルクの報告を受け、シュトラウスは下令<sup>かれい</sup>した。

日没直後であれば、まだ薄暮<sup>はくぼ</sup>だ。ここは大事を取

りたい。

「潜望鏡深度まで浮上」

一九時になったところで、シュトラウスは命じた。発令所の左右から海水の排出音が届き、U568はゆっくりと浮上を開始した。

「深さ七〇……六〇……」

潜舵<sup>せんた</sup>を担当する操舵士のハンス・ウェーバー一等兵曹が、深度計の数字を読み上げる。

「敵艦の推進機音、探信音はないか？」

シュトラウスはシュプケに聞いた。

海水の排出音を、敵艦に捉えられた可能性はある。

四月一三日に奇襲をかけた機動部隊と異なり、相手は対潜戦闘の専門部隊だ。Uボートの捕捉と撃沈を第一と考<sup>かんが</sup>えている敵だ。

駆逐艦の水測員は、どれほど小さな音も聞き逃すまいと、全神経を聴覚に集中している。

「右後方に推進機音が聞こえますが、本艦に接近する様子はありません」

シユプケが答えた。

「引き上げにかかったのかもしれんな」

シユトラウスは、敵の意図を推測した。

接近する様子がない以上、U568の存在は知られていないと判断できる。

敵は、夜間のUボート狩りは返り討ちに遭う危険が大きいため、基地に帰還しようとしているのかもしれない。

U568が深さ一五メートルに達するまで、何も起こらなかつた。

敵の駆逐艦が変針してU568に向かって来ることも、爆雷が投下されることもない。

敵は、海中の動きに気づいていないのだ。

「潜望鏡上げ」

を、シユトラウスは下令した。

潜望鏡脇のハンドルを掴み、アイピースに両目を押し当てた。

おぼろげな光に照らし出された海面が、丸く狭い

視界に入つて来た。

月光が、海面を照らし出しているのだ。

この日の月齢は一〇。満月と半月の中間であり、光量は比較的多い。

その光の下に、複数の艦影が認められた。

視界の中に見えるのは、商船のような艦影を持つ中型艦が一隻に小型艦が二隻だ。

シユトラウスは、一旦潜望鏡を降ろした。

月齢一〇の月明かりで、潜望鏡のような小さな目標が発見されるとは考え難いが、日本軍には特殊な訓練によって、暗視視力を強化した夜戦見張員がいるとの情報がある。

彼らは、科学技術の面ではドイツに及ばないが、肉体を鍛えることで補っているのだ。

「微速前進。面舵一杯。針路四五度！」

「雷撃目標、右前方の中型艦！」

シユトラウスは、二つの命令を発した。

「微速前進。宜候！」

「面舵一杯。針路四五度！」

機関長グスタフ・シエラー中尉とマイスナー航海長が、命令を復唱する。

U568は深さ一五メートルの海面下に潜んだまま、最小舵効速力の二ノットで前進しつつ、艦首を右に振った。

こちらの音を敵に聞きつけられるのでは、と危惧したが、シユプケからの報告はない。

Uボートの推進機音は、中型艦や駆逐艦の推進機音に遮られ、聞き取れないのだろう。

「目標は巡洋艦ですか？」

ノイベルクが聞いた。既に発射管制盤に取り付き、準備を整えている。

「水上機母艦と推定される。対潜部隊の中核だ」

シユトラウスは返答した。

コロンボに潜入しているスパイは、日本軍が商船を改装した特設水上機母艦をセイロン島に派遣している旨を報告している。

水上機一〇機程度の運用能力を持ち、駆逐艦と組んで、セイロン島の周辺を哨戒しているのだ。

五月以降、インド洋で未帰還となるUボートが増大したのは、特設水上機母艦を中心とした対潜部隊に沈められたためではないかと、本国の潜水艦隊司令部は睨んでいる。

厄介な敵だが、比較的仕留めやすい目標だ。

元は商船であるため、速力は遅い。防御力も乏しいため、魚雷一本か二本の命中で沈められる可能性が高い。

何よりもこの艦を仕留めれば、今後の戦いで、自分も戦友たちも助かる。

「堅実な戦いで戦果を上げる」という、シユトラウスの基本姿勢に合致する相手だ。

U568が動きを止めた。

再び潜望鏡が上げられ、シユトラウスはアイピースに両目を押し当てた。

北上する艦隊がぼんやりと見える。

★ご覧いただいた立ち読み用書籍はPDF形式で、作成されています。この続きは書店にてお求めの上、お楽しみください。